書評

夢の落葉を

八木秋子著／JCA出版

何んとも可憐純真な文集が出版された。第一集〈近代の〈負〉を背負う女〉は論文時評小説ルポ集で今日の若者の言葉だとどこかツッパッタ姿勢があったがーそれは思想を生きる者として仕方のない面もあるーここでは清純で可愛い珠玉の文が見受けられる。都会生活者としての八木秋子は三日月に祈る山中鹿之助と同じく〈われに七難八苦を与え給え〉と言う楽天性と悲壮味が混在しているが、前書きにあるような忙しい寮母生活を生きる合い間に書いた、どこに発表する宛のない文集では、木曾福島に残してきた〈八木あき〉に心ゆくばかり語らせている。つまり都会文明の氾濫のたゞ中で、なしくづしにすり減らされて行く生命をいとおしむ時、また精気を求めて再生を願う時、彼女の言うプリミティブなものとは木曾福島の〈樹からふきあがる緑〉であり、〈寒気のするようなふかい青〉い淵でであり、キソノナカノリさんであって、そうした故郷の万象を呼びだし語りかけ、また語らせることで自己の心の平衡を保とうとしたのだ。例文一つ。

「警官が提灯をかかげ声を涸らしてそばをとびまわっている。群衆はスリルを追って東に、西に押しあい、もまれながら進み退いたりする。ヒヤリとする最高の瞬間は、横からぐるりとまわしてタテにまくりたおすとき。町幅いっぱいのおみこしの横木は、タテにぐらぐらと突っ立つ、どちらへ倒されるか、人々はぱっと後ずさる。店の軒があぶない。あぶない、ソースケ・コースケ。二階から見おろしているその鼻先きに、横木のあたまがぬっと近よる、呼吸をつめる、その瞬間、あッというまにどッしんと倒れた。無事。…たちまちとびついて、宗助・幸助、とはじまる。ダンヂリが危ない。」（福島の氏神まつり）P44。この叙述の中にまつりの熱気が活写されている。文章構成は凝音の多用と名詞切れによって実際の祭りの進行をスナップショットのようにパッチリカメラに納めるーつまり文章で定着させている。そこがなかなかの文章家であるゆえんで、心憎い書きぶり。六〇才代で書いたみづみづしさに恐れ入る。

アナーキズム文学は終った、アナーキストの文学があってよい…と語ったアナーキスト詩人がいる。これまでそうした提言はあったが実作にめぐりあう機会がなかった。八木さんのこの文集はさような規定さえどんなに無意味であるかを示すだろう。思想性とは自分で獲得するものであって、それはさりげなく、ひっそりと、心を鎮めて視る人にだけ提示されるものであるらしい。八木さんはそう教えて呉れる。

大宮市　橋本義春

リベルテール

1972.11

1972.11.
リベルテール